医療者と医療・福祉に関わる人を結ぶ ―――――――――― ドクターズプラザ

DRP

5月号
VOL.145 May 2018

巻頭インタビュー／線維筋痛症
NPO法人線維筋痛症友の会　理事長　橋本裕子氏
話を聞き、病院を紹介し、患者さんを支える

連載
僻地・離島医療 ⑪／熊本県・上天草市立上天草総合病院
医師不足や高齢化の波の中で試行錯誤の日々

連載
海外で活躍する医療者たち ㉓／国立国際医療研究センター
「本当に住民の役に立っているか?」を意識

新連載
職場訪問 ①／戸塚共立レディースクリニック
信念を持って目指して欲しい

医療者と医療・福祉に関わる人を結ぶ DRP ドクターズプラザ

5月号
VOL.145
May 2018

INDEX

◆ 巻頭インタビュー／線維筋痛症 …… 4
NPO法人線維筋痛症友の会 理事長 橋本裕子氏
話を聞き、病院を紹介し、患者さんを支える
◆ 連 載
僻地・離島医療⑪／熊本県・上天草市立上天草総合病院 …… 6
上天草市立上天草総合病院 院長 蓮尾友伸氏
医師不足や高齢化の波の中で試行錯誤の日々
◆ 連 載
よしこ先生のメンタルヘルス㊾ …… 9
あなたの家族が認知症になったら
立正大学心理学部教授・博士（医学） 西松 能子
◆ 連 載
海外で活躍する医療者たち㉓／国立国際医療研究センター …… 10
国際医療協力局 運営企画部・保健医療開発課 平山隆則氏
「本当に住民の役に立っているか？」を意識
◆ 新連載
薬剤師のお仕事① …… 12
薬剤師を取り巻く状況の変化
株式会社メディカル・プロフィックス、株式会社ファーマ・プラス 取締役
一般社団法人 保険薬局経営者連合会 副会長 小黒 佳代子
◆ 連 載
微生物・感染症講座㊹ …… 13
芽胞形成菌
静岡県立大学食品栄養科学部環境生命科学科 大学院食品栄養環境科学研究院 助教 内藤 博敬
◆ 新連載
介護の潮流① …… 14
介護Uターンという「お宝」人材
ケアタウン総合研究所・代表 高室 成幸
◆ 連 載
医療法⑦ …… 15
医療機関の開設の手続き
行政書士 成城大学非常勤講師 スピカ総合法務事務所・所長 竹内 千佳
◆ 連 載
健康サポーターえむぞぅくん ―睡眠編― …… 16
早起きして早寝をするぞぅ!
作・画 あさみさとる ／ 監修 西松能子〔立正大学心理学部教授・博士(医学)〕
◆ 新連載
病院給食① …… 18
食事療養の費用に係る評価の変遷
株式会社LEOC 専務執行役員 池田 直人
◆ 連 載
医療系学生インタビュー㉖／武藤康輔さん（防衛医科大学医学部医学科4年）…20
エンターテイメント要素を加え前向きな気持ちになれる病院づくりを！
医療系学生インタビュー㉗／西川裕里香さん（横浜市立大学医学部4年）…… 21
広い視野で日々を楽しめる医療者に
◆ 新連載
病院建築① …… 22
設計者とどのように付き合うか
株式会社伊藤喜三郎建築研究所 執行役員 設計本部 第二設計部長 服部 敬人
◆ 連 載
地域医療・北海道㉜ …… 23
地域の中小病院はどこを向くべきか
社会福祉法人北海道社会事業協会小樽病院 外科 横山 和之
◆ 連 載
野菜考⑥／JA熊本経済連 …… 24
JA熊本経済連 園芸部園芸販売課 課長補佐 佐藤暢寿氏
JA熊本経済連 熊本県青果物消費拡大協議会 國武香穂里氏
震災で見た生産者の底力
◆ 新連載
職場訪問① …… 26
戸塚共立レディースクリニック 助産師 名取伸子氏
信念を持って目指してほしい
◆ 連 載
川柳漫語㊺ …… 28
改めて、川柳とは？
（一社）全日本川柳協会理事 獨協大学オープンカレッジ講師 江畑 哲男
◆ 連 載
魅地探索⑫／熊本県・上天草市 …… 29
◆ 感想を募集！・編集後記・読者プレゼント …… 30

ANA Business Solutions
●「接遇マナー」セミナー
●ヒューマンエラー対策セミナー ●公開講座／講師派遣
機内で、空港で、オフィスでANAが培ってきた
ノウハウをベースにANAビジネスソリューションが
お送りする教育プログラム

詳細は▶ https://www.abc.jp/ 03-5791-2910

◆ 広 告
一般社団法人ヘルスケアプランナー検定協会 …… 2
ＡＮＡビジネスソリューション株式会社 …… 3
東京家政大学 …… 31
国立国際医療研究センター 国際医療協力局 …… 31
株式会社トンボ鉛筆 …… 32

表紙の言葉

昨年度までの「アスリート」に替わり、本年度から医療機関で働く職員の方々に「表紙」と「職場訪問（インタビュー）」に登場していただく新シリーズが始まりました。第1回目の表紙に登場していただいたのは、「戸塚共立レディースクリニック」の院長・清河康氏と助産師の名取伸子氏です。また、「職場訪問」では、助産師の名取氏に助産師のお仕事についてお聞きしました。

本誌では毎回、表紙に登場していただいた方の「職場訪問（インタビュー）」も掲載する予定です。是非、お楽しみに！

さて、今回の表紙に登場していただいたお二人が勤務する「戸塚共立レディースクリニック」は、平成29年4月、地域の要望に応え新規開院したばかりのクリニックです。「横浜市戸塚区を中心に地域医療を提供する医療法人横浜柏堤会が、これまで類のないコンセプトを掲げ新設した多世代共生施設『ONE FOR ALL 横浜』内にあり、その中の一役として分娩や手術にも対応する女性のトータルヘルスケアを提供している」（清河氏）とのことです。

（表紙撮影場所：戸塚共立レディースクリニック）

撮影：居木 陽子

プロフィール

愛媛県出身。
動物カメラマンのアシスタントを経て、2008年より
フリーランスカメラマンとして活動。
出版社のスタジオカメラマンも経験し、書籍、取材撮影、
パンフレット、冊子撮影、ホームページ撮影、料理撮影、
動物撮影などジャンルを問わず活動。
人物、動物撮影を得意とする。

◆ 発 行 所
株式会社ドクターズプラザ
〒162-0826
東京都新宿区市谷船河原町9-1
NBCアネックス市谷ビル7F
TEL 03-6280-7780
FAX 03-3513-0760
URL：https://www.drp.ne.jp/
E-mail：mag@drp.ne.jp

情報発信中です！
@doctorsplaza @hcp.drp

◆ 発 行 人 鈴木久夫
編 集 長 皆藤英夫
編集スタッフ 矢野安理佐、稲佐知子、杉本恭子
編集・取材協力 ＮＰＯ法人
日本医学交流協会医療団
◆ デザイン・印刷 サンエーデザイン印刷
◆ 購 読 料 無料
◆ 発 行 日 年３回（1月・5月・9月） 1日

新連載 職場訪問① 戸塚共立レディースクリニック

信念を持って目指してほしい

助産師は、出産の神秘を目の当たりにできるやりがいのある仕事!?

10カ月もの間、胎内で育ててきた赤ちゃんを出産するのは、素晴らしく、しかしとても大変なこと。スムーズで自然なお産をするには、お母さんがいかにリラックスできるかが重要なのだそうだ。痛みや不安の中で頑張るお母さんを支え、赤ちゃんを取り上げる助産師は、女性にしかなれない珍しい職種である。昨年開院した戸塚共立レディースクリニックの助産師の名取伸子氏に、助産師の仕事や、そのやりがいなどについて伺った。

戸塚共立レディースクリニック
助産師　名取 伸子 氏

女性しかなれない助産師の仕事

――まず助産師とはどのような仕事なのか教えてください。

名取　「保健師助産師看護師法」に、「『助産師』とは、厚生労働大臣の免許を受けて、助産又は妊婦、じょく婦もしくは新生児の保健指導を行うことを業とする女子」と定められています。昔は「産婆さん」と呼ばれていましたが、法律の制定や教育制度の整備等に伴って、「助産婦」に、また「助産師」に改称されています。

具体的な仕事の内容としては、赤ちゃんを取り上げるだけではなく、妊婦さんの健康や生活の指導から、出産後の体調管理といった周産期全般、育児、また女性の各ライフステージをケアしていく仕事です。

例えば私の場合は、日勤は8時半～17時までの勤務で、朝礼の後、9時から病棟のラウンド、その後は随時、出産のフォローや診察の介助、医師への報告や連絡等を行っています。夜勤は16時半～翌朝9時までで、交代で担当します。

――助産師になるには、どのようなステップがあるのですか。

名取　助産師になるには、助産師国家試験に合格し、厚生労働大臣の免許を受ける必要があります。助産師国家試験を受験するには、まず看護師の資格が必要なので、看護学校等を卒業して看護師国家試験に合格していなければなりません。さらに、文部科学大臣の指定した学校、あるいは厚生労働大臣の指定した助産師養成所を卒業すれば、助産師国家試験を受験することができます。

――男性は助産師になれないそうですが、男性より女性の方が良いと思いますか。

名取　分娩の際に緊張するとお産が進まなくなってしまうので、妊婦さんがリラックスできる環境をつくることはとても重要です。助産師が男性だと緊張してしまいますし、また産後に母乳の状態をケアすることも助産師の仕事で、必要な時にはおっぱいのマッサージもしますから、助産師という仕事に限っては女性であることに意味があると思います。

――一方で、昨今は男性が出産に立ち会うのは一般的になってきていますね。

名取　かつては、実家に帰ってお産をすることが多かったですし、昔はむしろ男性は邪魔にされていましたが、今は立ち会われることが多いですね。その背景には、核家族化が進んだり、両親が高齢であったり、あるいは親も仕事があって手伝うことができないなど、家族や時代の変化があるのではないかと推測しています。結果的に産後に頼るのはパパになりますから、お産から立ち会っていただき、赤ちゃんの父親になったことを早い段階で自覚してもらうことは大切です。

パパが来てくれると妊婦さんも安心感があるようですね。ママだけの子どもじゃなくて、パパの子どもでもあるので、頑張っているところを励ましてもらいたいという気持ちもあると思います。お産の時には、腰をさすってもらったり、飲み物を口に運んでもらったりしています。赤ちゃんが生まれて、「頑張ったね」とねぎらっている姿を見ると、良かったなと思いますね。

私自身が出産したときにも、夫は立ち会いました。後になって聞いてみると、私より夫の方が、赤ちゃんが生まれた時の様子をよく覚えています。

自らの妊娠をきっかけに助産師へ

――名取さんは助産師になって6年だそうですが、なぜ助産師という仕事を選んだのですか。

名取　私はもともと看護師で、小児外科とICU、CCUで仕事をしていました。看護師になったのは、私の姉が生まれつき体が弱く、入院することが多かったり、交通事故で手術を受けたりしていたので、病院で働く看護師さんを見ていたからだろうと思います。私自身は幸いとても健康体で、大きな病気も入院も経験がなく、患者さんの立場になったことはありませんでした。

助産師については、看護師になるための産科病棟での実習の印象が強く、知識も技術も、プロ意識も高く、学生に厳しい人という漠然としたイメージを持っていました。

でも私自身が妊娠して、妊婦健診を受診するようになった時、この経験が仕事に活かせないかなと思うようになりました。私の出産のときにケアしてくれた助産師さんが、ずっとそばにいて腰をさすってくれて、助産師に対するイメージも一変しました。母子保健に関わるには、助産師のほかに保健師という仕事もありますが、私は助産師になりたいと思い、出産後に助産師学校に行きました。

最初は埼玉県の産院で仕事をしましたが、同じ病院グループがこの戸塚共立レディースクリニックを開院することになり、準備段階から関わっています。

――子育てとの両立は大変なのでは。

名取　助産師に限ったことではないと思いますが、何かあれば呼び出されるので、子育てと両立するにはサポートしてくれる人がいないと難しいですね。私も含めて、子育てをしている常勤のスタッフは、みんな必死で頑張っています。

仕事上でストレスになることもありますが、私の場合は、家に帰ると二人の子どもがいるので、一気にスイッチが切り替わります。職場の同僚もよく話を聞いてくれるので、互いの状況が理解できる同じフィールドに人たちに聞いてもらえるだけでもスッキリします。一人で頑張っていると考えると引きずってしまうかもしれませんが、仲間がいて、家にも支えてくれる家族がいる。一人ではないということは、とても大事なのではないかと思います。

――どのようなときにやりがいを感じますか。

名取　お母さんがお産に対して前向きであったり、赤ちゃんをすごく大事に思っていたり、育児にも前向きに取り組めている様子を見ると、特にやりがいを感じます。

逆に、残念なことに赤ちゃんが仮死状態で生まれたりすることもありますから、そういうときはつらいですね。小児外科の看護師をしていたときも感じていましたが、覚悟をもってやらなければいけない仕事だと思っています。

お産が好き。今の仕事を続けたい

――戸塚共立レディースクリニックは2017年4月に開院しましたが、どのような職場ですか。

名取　現在、助産師は常勤が8名、非常勤が18名、看護師は常勤が1名、非常勤が7名、看護補助の常勤が1名です。非常勤の助産師は、月1回の夜勤を担当してくれる人、週4回日勤で来てくれる人などさまざまです。

職場環境は、その病院やクリニックが求められている役割によって異なります。例えば大学病院は、妊娠・出産・生まれてくる赤ちゃんにリスクのある方のための施設ですから、緊急度が高い処置や手術もあります。また、年間のお産が1500件、2000件という病院ならば、昼夜を問わずお産があるので、スタッフが少ない夜勤は特に忙しいでしょう。また同じ助産師でも、どこで働くかによって働き方はそれぞれです。

当院の場合は、現段階ではまだ分娩件数はそれほど多くなく、19床のうち常に5床～10床が利用されている状態です。そのため、1件のお産にゆったり関われるのがとてもいいと思っています。また当院の院長先生は助産師の意見を尊重してくださるので、私たちから状況を説明し、提案することもよくあります。

妊婦さんから「こういうお産がしたい」という希望があれば、極力かなえられるように考えるクリニックですし、一人の助産師が長く関われるのでリラックスしていただけるい環境が整っていると思います。人がたくさん出入りすると、お産の過程で緊張してしまい、お産の妨げになることもありますが、なるべく同じスタッフが見守り、お産が進んでいくことで相談しながらあうんの呼吸を作っていくことができます。

――これまでの仕事の中で特に記憶に残っていることはありますか。

名取　一つは、学生の時に、初めてお産を担当させていただいた方のことです。その赤ちゃんが1人目のお子さんだったのですが、私が就職後、2人目の赤ちゃんを出産されるときも、たまたま私が担当することになりました。全くの偶然なのですが、今でも、2人の赤ちゃんのお名前や、体重も覚えています。

もう一つは、このクリニックの準備、開院を経て、久しぶりにお産を担当した時のことです。初めてのお子さんで、お母さんは痛みでパニックになりながらも、コミュニケーションがうまく取れて、呼吸もスムーズで上手でした。お母さんが上手に呼吸できると、赤ちゃんも元気な状態でいられるので、自然に生まれるのを待つことができるのです。まだ破水していなかったので、赤ちゃんは膜に包まれた羊水の中にいる状態で産道から見えてきた時に、羊水の中の赤ちゃんの髪の毛が、フワッフワッと漂っていてとても神秘的でした。お産の神秘を目の当たりにして、とても感動しました。

こういう経験は、助産師でなければできないですね。お産が好きなうちは、分娩を継続して担当しながら、今の仕事を続けたいと思っています。

――最後に、助産師を目指したい方に、アドバイスをお願いいたします。

名取　助産師は、とてもやりがいのある仕事です。お産が好きで、母子保健が好きで、仕事が好きな方におすすめしたいですね。また新生児の蘇生法一つでも5年に1回は改定されるなど、どんどん進化していきますから、勉強熱心な方が向いていると思います。

助産師は、信念を持ってなりたいと思う方でないと厳しいかもしれません。私の経験から申し上げると、助産師学校での実習は、看護学生の実習よりかなり厳しいですし、実際実習を指導していると、残念ながらそこで挫折してしまう人もいます。そして、やはり真摯に患者さんと向き合えることが重要だと思います。

戸塚共立レディースクリニック発行の季刊誌「こうのとり冬号」。流行の病気の話やスタッフ考案のレシピ等を掲載。

戸塚共立レディースクリニック外観

同僚（助産師）の五反田美和さん（右）